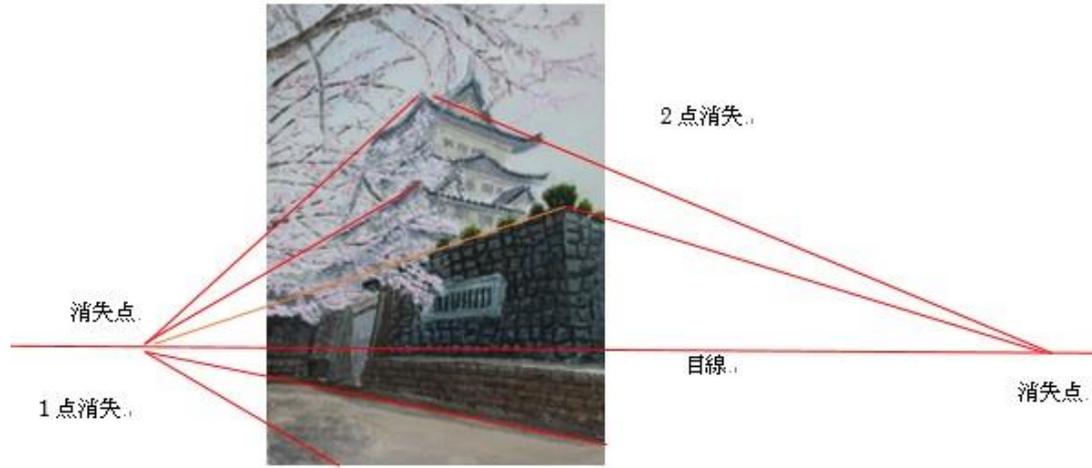


水彩画を楽しむ

この千葉城を絵にしたい、鎌倉から贈られた芍薬の花を描きたい、と衝動に迫られて、まず、画用紙と絵具を揃える。千葉城を描くとき、頭上に覆いかかる桜、目の前の石垣、そこに築かれている天守閣、手前から延びる道路奥の城門そして空を描く。まず、冷静に、点透視図法（線遠近法、perspective。パースといふことが多い）を思い浮かべながら、視線にあるようにスケッチする。

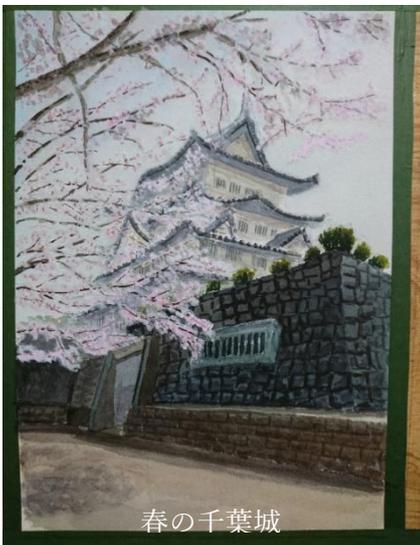


千葉城の写真



点透視図法

スケッチでパースが合っているように見えれば、あるいは視ているように感じられれば、まずホッとす。でも、この千葉城を絵に描きたいという衝動は、どっしりと頑丈に見える石垣、その上に築かれた優美な天守閣に、強さと安定感の中に落ち着きを求める気持ちを表現したい、との思いだった。

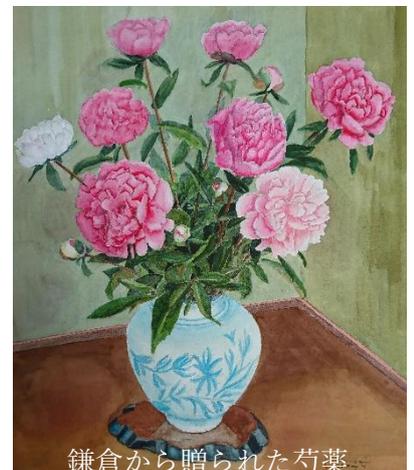


春の千葉城

これはスケッチの後の次の技法で言えば、空気遠近法。空気の厚みが増すごとに、光の濃淡を感じ、色の輝度差を感じながら描き進めていく。スケッチがよくできたと思うときは、まず怖い。それぞれの場所に見える色/光よりも薄く/弱く彩色を始める。時には色を見間違える。水と「激落ち」で色を拭い去る積りが、画用紙が破れそうになる。奥から手前に向けて色/光を強く/鮮明に。それには、幾度も視て、色を合わせながら徐々に濃く、重ねてまた重ねて、滲ませたりしながら濃淡の移り変わりが徐々に変わる（グラデーション）、あるいはきっちりと変わるところを表現する。この過程で自分の思いが自然に絵に映ってくるというもの。自分では想いのほかい絵になったと、一人喜んで

ていました。この絵の場合は観ていた以上に石垣は強く、その上の天守閣はか弱い程になっているでしょうか。

今思い出すと、描いた当時は 2 月後に迫るグループ展の企画の進め方に迷っていたのが、このスケッチの帰り路にクリティカルパス手法がいろいろ沸いてきて、旨くまとめることができました。



鎌倉から贈られた芍薬